

高砂族に命を預ける

かじわきとむひで
門脇朝秀

● 理事
あけぼの会主宰



門脇朝秀理事

「人生意気に感ず」とは、「人生は打算ではない」ということだろう。私は大正の初めに今の韓国で生まれ、学校と兵役をそこで済ませた後に満州へ渡り、華北、蒙古の各地を転々とした。その後、満州の大連で終戦を迎え、ソ連の占領下で敗戦国民としての哀れな体験を味わった。

このように私はさまざまな命がけのことをやってきたが、その間、日本人など多くの民族の地金というものを見せてもらった。

戦後も折を見てはかつての地へ行き、往時の友人知己を訪ねて回ったが、みな個人としてはともかく、やはり政治環境というものがあって、もはや「人生意気に感ず」とはならなかった。

それでは日本ではどうかといえば、戦後の反日の嵐の中で、若い世代との間では、日本人としての共通の感激すら持ち得ない状態になって

しまった。

そうしたなか、初めて台湾を訪れた。当時は戒厳令の時代で、国民党政権は中国に出入りしていた私の入国を喜ばなかった。そこで「台湾は貧しいという中国本土の宣伝がウソと違うなら、私を入国させてみる」と駄々をこね、ようやく入れてもらったのだ。

現地では多くの初対面の人たちから、戒厳令下の恐ろしい話を聞かされ、台湾人への同情が高まった。そして何度か訪問を重ねるうち、霧社、烏来、屏東、台東などの原住民(高砂族)と巡り合い、お互い素朴な言葉のやり取りをするうちに、何だかこの人たちのためなら命を預けてもよいのではないかと考えるようになった。

これは山地に限らず平地でもそうだが、台湾では山野の隅々にまで、日本に寄せる郷愁が

漂っていた。たとえば今日、日本では歌われなくなった往時の軍歌、愛国歌を原住民の女性たちが歌うのを聞くと、感に堪えず涙がこぼれるのである。それはつまり、そこにかつての日本が残っていたからだろう。私は愚鈍で大した力もないが、もしできることがあれば何とか彼らのために、と思い始めていた。

かくして損得を抜きにした私の台湾行脚が始まり、戦時中の高砂義勇隊、特別志願兵、ビルマ派遣軍の従軍者なども訪ねて回った。

また、「あけぼの会」として原住民の元日本兵や遺族などの日本招待も行ってきた。近々念願叶い、霧社事件の首謀者モナ・ルダウ直系の孫、タツクンさんも招く予定だ。

戦後、中国から渡来した国民党政権は、霧社事件を「抗日愛国」と評価し、タツクンさんら蜂起グループの後裔が住む霧社・川中島（現・清流）の住民を、全台湾切つての「愛国分子」と賞賛してきた。

昨年十月にも霧社において彼らや県知事列席の下、事件七十四周年の式典が開かれた。私も

「あけぼの会」会員と参列したが、そこではかつての「日本の圧制」への非難が行われた。ところが面白いことに、翌日の川中島でのカラオケ大会では、彼らは今の日本人以上に上手に日本語の歌を歌っているのである。

そこで、私は彼らに「お前さんたちは誰か（政府）を気にしてあれこれ並べているが、私のみんなへの親しみに変わりはない」と話した。タツクンさんには「奥さんや子供を連れて、日本へ来てくれんか。日本の風に吹かれながら、本音で語り合おうではないか」と誘ったわけだ。お互いの感情の精算のために。

打算を越えた日台の心の絆を、何とか守って行きたいと私は願っている。戦争で亡くなった台湾人たちもそう願っているだろう。本当はこれは日本政府がやるべきことだと思うが、それは望めない。だから私は、自分のやれることをやるだけだ。

最近、タツクンさんの奥さんから手紙が来た。わが会の機関誌「あけぼの」二月号に掲載するから、参考までに読んで下されば幸甚である。